

震災 6年

防災力を高める ④

「あれだけの犠牲を出したというのに……」住民2001人が津波で命を落とした宮城県石巻市上釜地区。町内会自主防災会で事務局長を務める井上達彦さん(65)が顔を曇らせた。

自主防災会ができたのは2年前。避難路マップを作り、震災前はなかった避難訓練も始めた。しかし、訓練の参加率は2年連続で2割に満たない。「あんな地震、もうないよね」と思われているとしたら怖い」と井上さん。

被災地で4年ぶりの津波警報が発令された昨年11月も、支援が必要な15人のうち、2人しか連れ出せなかった。井上さんは根気よく住民に訴えていくつもりだ。「今は震災後じゃない。次に備えなきゃいけない震災前なんです」

6年前の惨状を目にした人間にも風化の波は迫る。あの緊張感を覚えておくことこそ、本来は防災力強化に最も



津波が襲った6年前の宮城県石巻市・上釜地区。井上さん宅2階からの光景だ(井上さん提供)

語り続ける 風化防ぐため

阪神、熊本……被災地で連携も



「語り部バス」の参加者に当時の状況を説明する伊藤さん(宮城県南三陸町で)

効果があるのだが、思うようには進まない。時にその努力は住民感情とぶつかる。

千葉県浦安市では地域の86%が液状化に見舞われた。地表から1層ほど飛び出したマシンの角、今も公園の一角に保存されている。住民からは「つらい記憶を思い出す」「地域のイメージが悪化する」という声もあったという。

市はこのモニメントの周りに植樹するなど、目立ちすぎないようにした。記憶をモノで残すには、被災者への十分な配慮が必要だ。

一方、被災体験の語り部たちも、住民の思わぬ言葉にショックを受けるようになった。液状化で飛び出したマシンの角に植樹するなどして保存された(千葉県浦安市の蘇州中央公園)

た。

「いつまでやっているの」宮城県南三陸町の語り部、伊藤俊さん(41)は、最近こころ聞かれたという。「過去の津波の教訓を生かしていたら、6年前も救えた命はもっとたくさんあったはずなのに」

「語り部バス」ツアーは、伊藤さんが普段働く「南三陸ホテル観洋」の宿泊客を対象に、毎朝約1時間行われる。伊藤さんらホテルスタッフ8人が交代で語り部を務め、これまで10万人以上を案内した。

破壊された庁舎や学校、病院の跡地を巡るバスの中で、最大20分の津波が襲った時の様子を披露すると、涙ぐむ参加者も。「語り続けなければ……津波で消えた街並みが初めからなかったことになってしまふ」。伊藤さんは力を込める。

2月末、兵庫県淡路市で、全国被災地語り部シンポジウムが開かれた。阪神大震災の語り部や、昨年4月に起き

た熊本地震の被災地関係者も登壇。教訓を伝え続けるため、各地の語り部が連携していくことが確認された。

日本は首都直下地震、南海トラフ巨大地震など様々なリスクを抱える。行政任せにせず、我々一人一人が防災力を高めるには、過去の震災犠牲を無駄にしないという姿勢が出発点といえる。(おわり)

5組男子 応用化学系
2017. 3. 11 読売新聞